

# 第 3 章

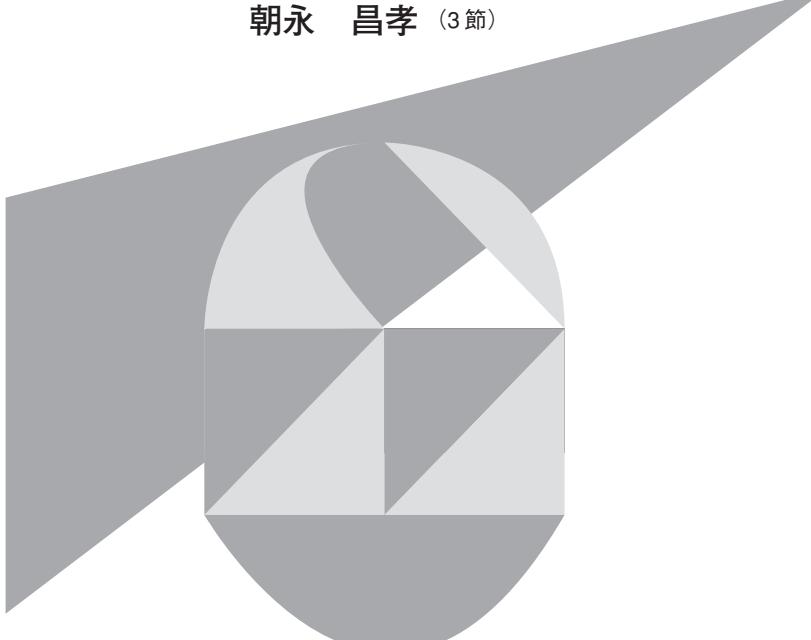
## 学習について

桜井 茂男 (1節1・2項)

鷺尾 奈都 (1節3項)

古賀 正義 (2節)

朝永 昌孝 (3節)



## 第1節

## 学習の様子

## 1. 得意なこと・苦手なこと

どのようなことが得意（苦手）であるかを子どもにたずねた。小学生は、中学生や高校生に比べて得意とすることが多く、有能感の高いことがわかった。性別では、男子は考えることが、女子は楽器を演奏することや物を作ることが得意であった。また、考えることが得意な子どもほど、成績もよいことが明らかになった。

## ◆ 有能感が高い小学生

子どもは、どんなことが得意で、どんなことが苦手と思っているのだろうか。図3-1-1は15項目（「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」から「リーダーとしてグループをまとめること」）について、自分が得意と思う（「とても得意」＋「やや得意」）割合を学校段階別にみたものである。これから3つのことが指摘できる。

第1は、「論理的に（すじ道を立てて）ものを考えること」を除くすべての項目において、小学生が、中学生や高校生よりも得意と思う割合が高いということである。このことは、小学生がより高い有能感（自信）をもっていることを意味している。発達的にみると、好ましいことである。なぜならば、中学校以降ますます難しいことを学ばなければならぬ子どもにとって、この有能感があるからこそ、その後の学習にも果敢に取り組んでいくからである。

ただし、「論理的に（すじ道を立てて）ものを考えること」には、それとは反対の傾向がみられる。実は、心理学の研究によると論理的思考は中学生くらいからうまくできるようになるのである。この結果はそのことを再

現しているものと思われる。

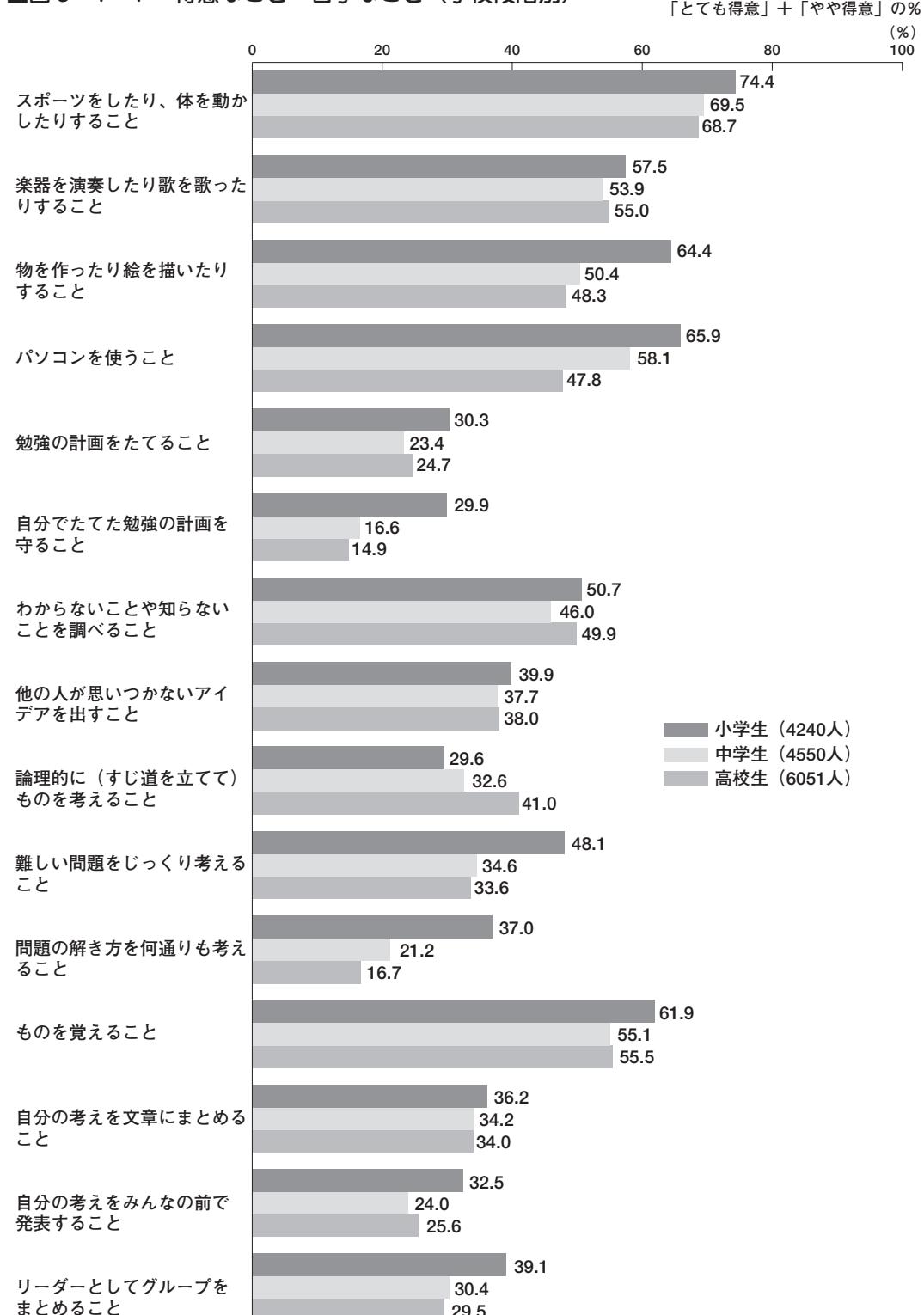
## ◆ スポーツやパソコン、覚えることや調べることが得意な現代っ子

第2は、15項目のうちで得意と思う割合が高いのは「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」と「パソコンを使うこと」である。「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」は、いずれの学校段階でも第1位であるという点だ。こうしたことが得意というのは、現代っ子らしいのではないだろうか。

第3は、学習活動に強く関連した項目に注目してみると、「ものを覚えること」や「わからないことや知らないことを調べること」に対して得意と思う（「とても得意」＋「やや得意」）割合が高いということである。「ものを覚えること」は学習の基本であるため、すばらしいことと言える。

また、「わからないことや知らないことを調べること」は、いわゆる情報収集活動であり、これからの学習活動にとってきわめて重要なことである。これは先ほどの「パソコンを使うこと」が得意であるという点と関連しているものと思われる。

■図3-1-1 得意なこと・苦手なこと（学校段階別）



## ◆ 考えることが得意な男子、音楽や美術が得意な女子

得意と思うことをたずねる15項目について、性差を調べてみた。表3-1-1に各項目に対して得意と思う（「とても得意」＋「やや得意」）と回答した子どもの割合と差（男子－女子）が数値で示されている。これをみると15項目が大きく4つのグループに分けられる。

第1のグループは、男子が優位なグループである。「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」「論理的に（すじ道を立てて）ものを考えること」「難しい問題をじっくり考えること」「問題の解き方を何通りも考えること」の4項目である。「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」は男子のほうが圧倒的な差で（15ポイント以上の差）得意と思っている。これは生物学的な性差に起因しているのであろうか。

残りの3項目はいずれも“ものを見る”ことに関する項目である。これら3項目の性差を学校段階別に追ってみると、男子の優位が徐々に明確になる傾向がみえる。生物学的な性差に関連するとは考えられない。考えることは学習活動で中心的な役割を担っており、この性差の理由を早急に究明する必要があるだろう。

第2のグループは、女子が優位となるグループである。「楽器を演奏したり歌を歌ったりすること」「物を作ったり絵を描いたりすること」「自分の考えを文章にまとめる」との3項目である。「楽器を演奏したり歌を歌ったりすること」は20ポイント以上の差で、「物を作ったり絵を描いたりすること」は10ポイント以上の差で、どの学校段階でも女子が優位である。これらのこととは私たちがもつ

ている常識と一致するように思われる。

「自分の考えを文章にまとめること」については高校生になると差が5ポイント程度に縮まる。言語面では生まれながらに女性優位の性差があると言われるが、これもその現れであろうか。ただ、このデータで見る限り、高校生くらいになるとこの性差は縮まるようである。得意・苦手は、できる・できないという能力を基盤にして形成される可能性が高いため、その意味では高校生くらいになると能力としての性差が小さくなるのかもしれない。

## ◆ パソコンを使うこと、ものを覚えることに性差はない

第3のグループは、性差がほぼみられない（性差が数ポイント程度）グループである。「パソコンを使うこと」「わからないことや知らないことを調べること」「他の人が思いつかないアイデアを出すこと」「ものを覚えること」「自分の考えをみんなの前で発表すること」「リーダーとしてグループをまとめる」との6項目である。「自分の考えをみんなの前で発表すること」には、話し言葉の能力が関係しているように思われるが、データ上は差がみられない。これは“みんなの前で”発表するには自分の考えに自信がないと難しいからではないだろうか。話すこと（女子優位）、覚えること（男子優位）の性差が相殺された結果になっているように思われる。

第4のグループは、女子の優位が徐々に消失するグループで、「勉強の計画をたてる」と「自分でたてた勉強の計画を守ること」がこれに入る。いずれも生涯学習時代にあっては重要なことである。男女ともに得意とする割合が低いのが残念である。

■表3-1-1 得意なこと・苦手なこと（学校段階別、性別）

		男子	女子	(%) 差(男子-女子)
スポーツをしたり、体を動かしたりすること	小学生	81.8	66.5	15.3
	中学生	77.7	60.9	16.8
	高校生	76.3	60.5	15.8
楽器を演奏したり歌を歌ったりすること	小学生	41.5	74.6	-33.1
	中学生	37.4	70.6	-33.2
	高校生	43.5	67.9	-24.4
物を作ったり絵を描いたりすること	小学生	59.4	69.8	-10.4
	中学生	44.1	56.7	-12.6
	高校生	43.4	53.7	-10.3
パソコンを使うこと	小学生	66.0	66.0	0.0
	中学生	57.8	58.4	-0.6
	高校生	49.9	45.4	4.5
勉強の計画をたてる	小学生	25.6	35.2	-9.6
	中学生	22.7	24.2	-1.5
	高校生	24.3	25.1	-0.8
自分でたてた勉強の計画を守ること	小学生	27.4	32.6	-5.2
	中学生	17.9	15.1	2.8
	高校生	16.0	13.5	2.5
わからないことや知らないことを調べること	小学生	51.3	50.1	1.2
	中学生	47.7	44.0	3.7
	高校生	52.9	46.8	6.1
他の人が思いつかないアイデアを出すこと	小学生	43.0	36.8	6.2
	中学生	39.6	35.8	3.8
	高校生	40.0	35.7	4.3
論理的に(すじ道を立てて)ものを考える	小学生	30.1	28.8	1.3
	中学生	37.1	28.2	8.9
	高校生	47.3	33.9	13.4
難しい問題をじっくり考えること	小学生	52.3	43.6	8.7
	中学生	42.8	26.4	16.4
	高校生	41.7	24.7	17.0
問題の解き方を何通りも考えること	小学生	42.3	31.4	10.9
	中学生	29.6	12.9	16.7
	高校生	23.6	8.9	14.7
ものを見る	小学生	62.6	61.0	1.6
	中学生	57.3	53.0	4.3
	高校生	59.2	51.5	7.7
自分の考えを文章にまとめる	小学生	30.2	42.5	-12.3
	中学生	27.4	41.4	-14.0
	高校生	31.5	36.8	-5.3
自分の考えをみんなの前で発表すること	小学生	35.2	29.7	5.5
	中学生	24.4	23.6	0.8
	高校生	26.0	25.1	0.9
リーダーとしてグループをまとめること	小学生	38.0	40.3	-2.3
	中学生	29.2	31.4	-2.2
	高校生	27.8	31.4	-3.6

「とても得意」+「やや得意」の%

注) サンプル数は、小学生（4240人）・中学生（4550人）・高校生（6051人）

## ◆ スポーツ、音楽、図画工作が得意でも成績は高くなない

得意と思うことと成績との関係を調べた。小学生と中学生を、成績（小学生は4教科、中学生は5教科の成績の自己評価）によってそれぞれ3層（上位・中位・下位）に分け、各層において得意・苦手をたずねる項目で「とても得意」「やや得意」「やや苦手」「とても苦手」「無回答・不明」の5つのカテゴリーに入る子どもの割合を算出し、グラフにしたのが図3-1-2～4である。図3-1-2には「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」、図3-1-3には「パソコンを使うこと」、図3-1-4には「難しい問題をじっくり考えること」の結果が示されている。

得意・苦手の程度をたずねる15項目に対する回答は、大きく2つのグループに分けられる。

第1は、図3-1-2に代表されるもので、成績との間に特定の関係がないと判断できるグループである。図3-1-2にみられる特徴で言えば、「とても得意」＋「やや得意」までの割合が、3つに分けた成績層において差がない（同程度であること）ということである。このグループに入るのは「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」の他に、「楽器を演奏したり歌を歌ったりすること」「物を作ったり絵を描いたりすること」である。これらの項目については、それぞれ体育、音楽、美術の成績とは、当該成績が高いほど得意であると回答した子どもの割合が大きいという関係があるのだろうけれど、いわゆる実技系ではない教科の成績とはそのような関係はないものと思われる。

## ◆ 考えることが得意だと成績は上位

もう1つのグループは、成績が上位である

ほど得意と思う子どもの割合が大きくなるという関係が認められるグループである。第1のグループに入る「スポーツをしたり、体を動かしたりすること」「楽器を演奏したり歌を歌ったりすること」「物を作ったり絵を描いたりすること」を除くすべての項目がこのグループに入る。ただ、関係の強さによって弱いものと強いものとがある。

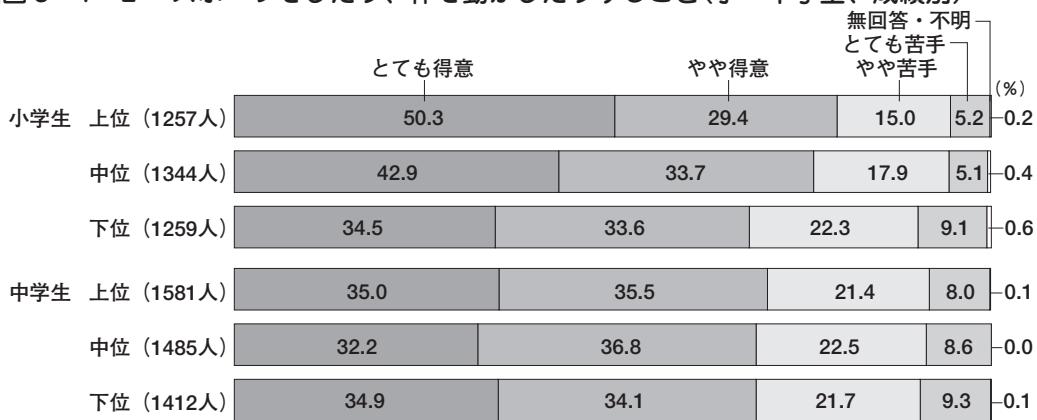
関係が弱いものは図3-1-3に示した「パソコンを使うこと」のみである。成績上位層ほど、パソコンを使うことを得意とする子どもの割合も大きくなる。ただ、中学生では、パソコンを使うことを得意とする子どもの割合は3つの成績層ときれいな対応関係を示していない。この点で両者の関係が弱いと言える。

図3-1-4のように、成績との関係が強いと判断されるのは残りのすべての項目である。図3-1-4に示されているのは「難しい問題をじっくり考えること」であるが、「論理的に（すじ道を立てて）ものを考えること」「難しい問題をじっくり考えること」「問題の解き方を何通りも考えること」の考え方、「ものを覚えること」の覚えること、「リーダーとしてグループをまとめる」とのリーダーシップを取ることなども含まれている。

## ◆ 得意なものと成績とが強く関係する小学生

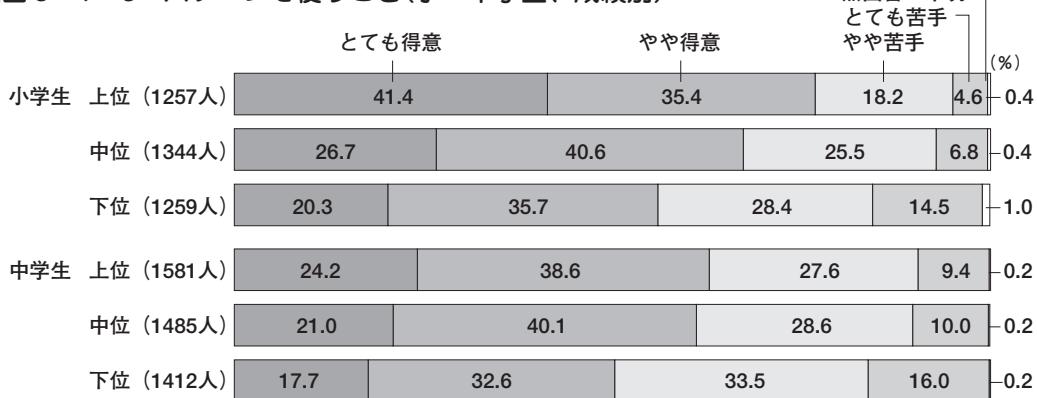
さて、15項目について総合的にみると、得意なことと成績が関係している項目は、中学生よりも小学生のほうで多いと言える。おそらくは中学生になると、得意というような要因の他に、学習習慣（学習時間の長さなど）や学習塾通いの程度などが関係してくるものと思われる。

■図3-1-2 スポーツをしたり、体を動かしたりすること(小・中学生、成績別)



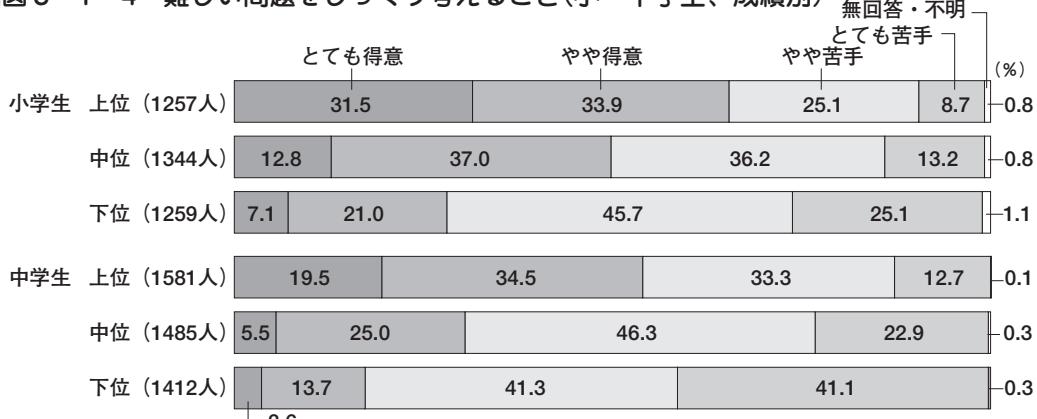
注) 成績(小・中学生)は、国語・算数(数学)・理科・社会・英語(中学生)の自己評価の合計点によって3区分した

■図3-1-3 パソコンを使うこと(小・中学生、成績別)



注) 成績(小・中学生)は、国語・算数(数学)・理科・社会・英語(中学生)の自己評価の合計点によって3区分した

■図3-1-4 難しい問題をじっくり考えること(小・中学生、成績別)



注) 成績(小・中学生)は、国語・算数(数学)・理科・社会・英語(中学生)の自己評価の合計点によって3区分した

## 2. 勉強する理由

勉強する理由、さらにそれと成績との関係を調べた。勉強する理由では「問題が解けるとうれしいから」や「自分がついたい仕事につくのに必要だから」といった肯定的な理由と「小学生（中学生・高校生）のうちは勉強しないといけないと思うから」や「勉強しないと頭が悪くなるから」といった否定的な理由が多くの子どもに認められた。成績との関係では、肯定的な理由で学ぶのは、成績上位層の子どもである傾向が明らかになった。

### ◆ 義務感や恐怖心から勉強するのか

学力低下の原因として学習意欲の低下が指摘される。学習意欲に大きな影響を与えるものの1つに「勉強をする目的や動機（勉強する理由）」がある。ここでは、子どもがどのような理由で勉強をしているのかをたずねた。**図3-1-5**には9つの勉強する理由に対する子どもの肯定的な回答（「とてもそう」＋「まあそう」）の割合が学校段階別に示されている。学校段階別に、数値の高い理由と低い理由をみてみよう。

まず上位3つの理由をあげてみよう。小学生では「問題が解けるとうれしいから」「勉強しないと頭が悪くなるから」「小学生のうちは勉強しないといけないと思うから」、中学生では「中学生のうちは勉強しないといけないと思うから」「勉強しないと頭が悪くなるから」「自分がついたい仕事につくのに必要だから」、高校生では「自分がついたい仕事につくのに必要だから」「高校生のうちは勉強しないといけないと思うから」「問題が解けるとうれしいから」がそれぞれ上位3つの理由である。

中学生は否定的な理由が上位2つに示されている。具体的には「中学生のうちは勉強しないといけないと思うから」といった義務感や「勉強しないと頭が悪くなるから」といった恐怖心に基づく理由が強いように思われる。一方、小学生や高校生ではそうした否定的な理由もあるが、上位2つは肯定的な理由、具体的には「問題が解けるとうれしいから」といった学ぶ楽しさと関連した理由や「自分

がついたい仕事につくのに必要だから」といった自己実現のための理由もみられ、やや救われる思いがする。

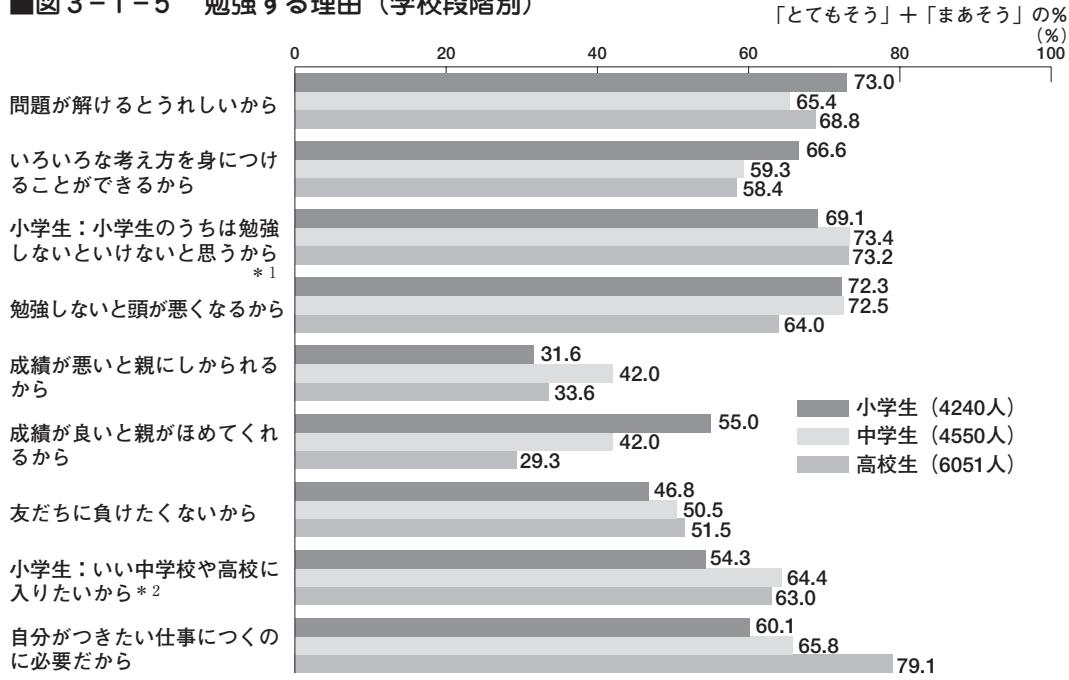
### ◆ しかられたりほめられたりするから勉強するのではない

下位2つの理由をみると、小学生では「成績が悪いと親にしかられるから」「友だちに負けたくないから」、中学生と高校生では「成績が悪いと親にしかられるから」「成績が良いと親がほめてくれるから」（順不同）である。勉強する理由が親にしかられるとか、ほめられるからといった親への依存とはあまり関係していないことが明らかになった。

### ◆ 高校生は自己実現のために勉強する

次に**図3-1-6**では4つの項目を取り上げ、「とてもそう」＋「まあそう」の割合を学年別のグラフによってその傾向を検討した。「問題が解けるとうれしいから」という理由には中2生までは低下し、中3生以降で高くなるという興味深い傾向がみられた。高校受験を控えているにもかかわらず中3生で学ぶ楽しさにかかる理由が高くなるというのはすごいと思われる。「成績が悪いと親にしかられるから」という理由は小6生まで低下し中1生で急に高くなり、また低下するという奇妙な傾向がみられた。「成績が良いと親がほめてくれるから」という理由は一貫して低下、「自分がついたい仕事につくのに必要だから」という理由はほぼ一貫して増加である。これらはおそらく典型的な発達指標と思われる。

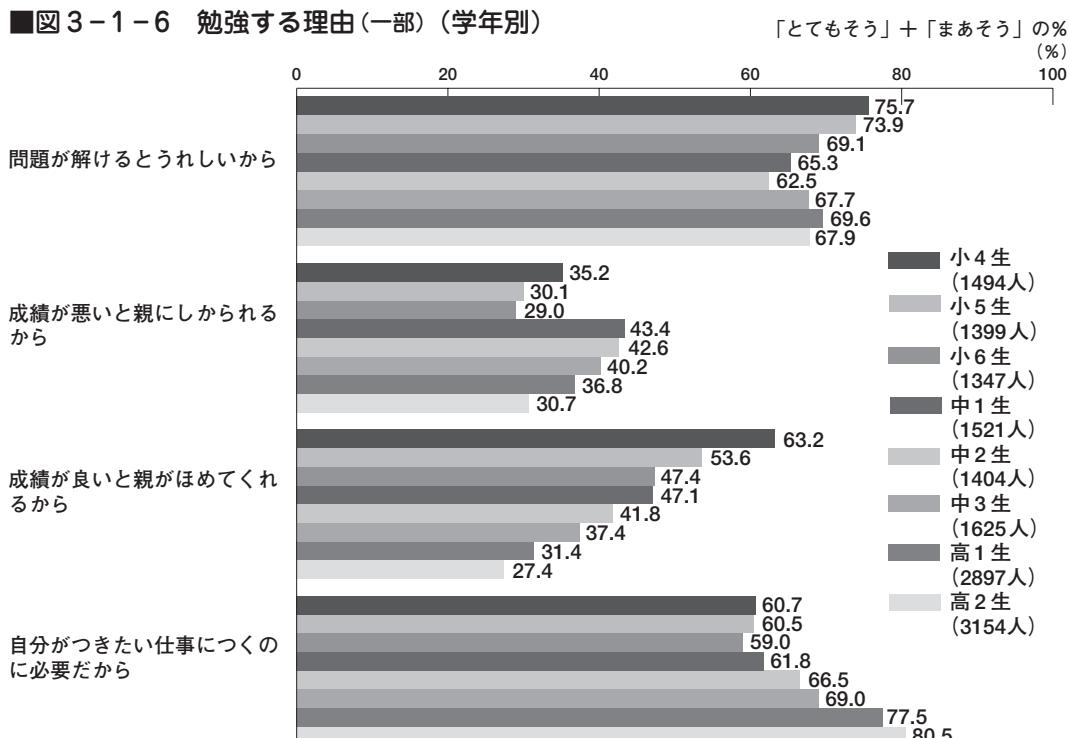
■図3-1-5 勉強する理由（学校段階別）



注1) \*1 中学生：中学生のうちは勉強しないといけないと思うから 高校生：高校生のうちは勉強しないといけないと思うから

注2) \*2 中学生：いい高校や大学に入りたいから 高校生：いい大学に入りたいから

■図3-1-6 勉強する理由(一部)（学年別）



## ◆前向きな理由をもつのは成績上位層の子ども

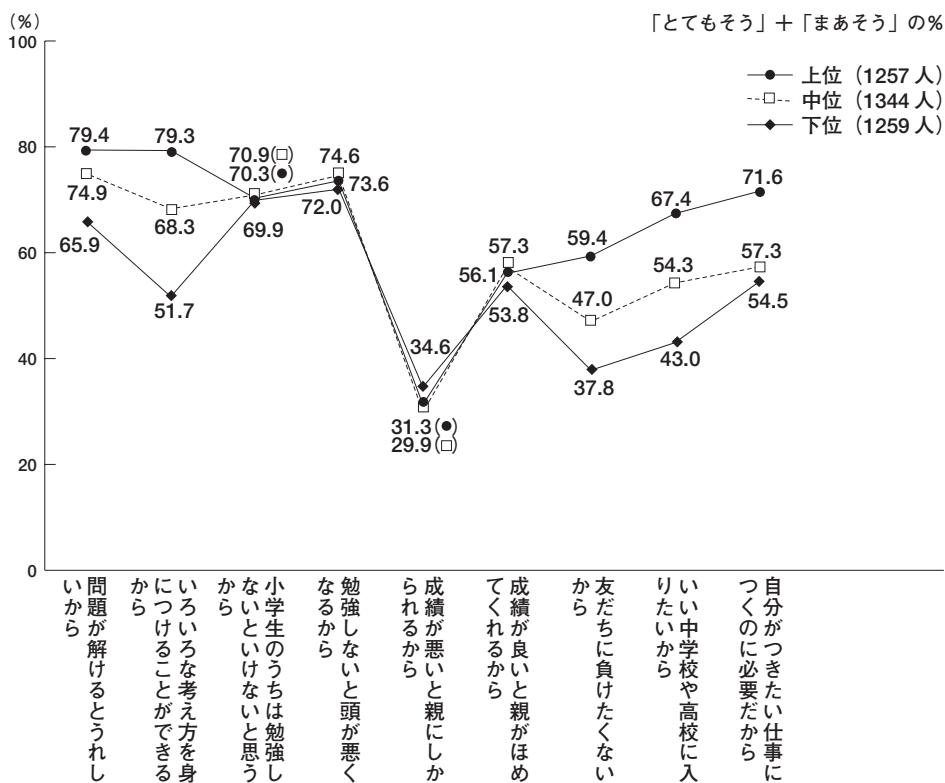
小学生と中学生を対象に、勉強する理由と成績との関係を調べた。成績を上位・中位・下位の3層に分け、その層のなかで、それぞれの勉強する理由に肯定的な回答（「とてもそう」+「まあそう」）をした子どもの割合を算出し、グラフにしたもののが図3-1-7（小学生）と図3-1-8（中学生）である。2つの図をみると、勉強する理由と成績の関係には、学校段階での差はほとんどみられないため、一緒に論じることにしたい。

まず、成績上位層の子どもほど、特定の勉強する理由を強くもつという関係が明確にみられるのは「いろいろな考え方を身につけることができるから」「いい中学校や高校（いい高校や大学）に入りたいから」「友だちに

負けたくないから」という3つの理由においてである。明確とは言えないが同様の関係がみられるのが、「問題が解けるとうれしいから」「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」という2つの理由においてである。これらのうち「いろいろな考え方を身につけることができるから」「いい中学校や高校（いい高校や大学）に入りたいから」「問題が解けるとうれしいから」「自分がつきたい仕事につくのに必要だから」という4項目は「勉強することに前向きな理由」である。またこの4項目を詳しくみると、「問題が解けるとうれしいから」という理由は学ぶ楽しさや知的好奇心と関連する内発的な動機に入り、これ以外の理由は自分のこと、とくに将来のことを考えた自己実現の動機（欲求）に入る。

一方、「友だちに負けたくないから」とい

■図3-1-7 勉強する理由（小学生、成績別）



注) 成績（小学生）は、国語・算数・理科・社会の自己評価の合計点によって3区分した

う理由は友だちとの競争を意図した理由であるが、これも成績に寄与している点は興味深い。

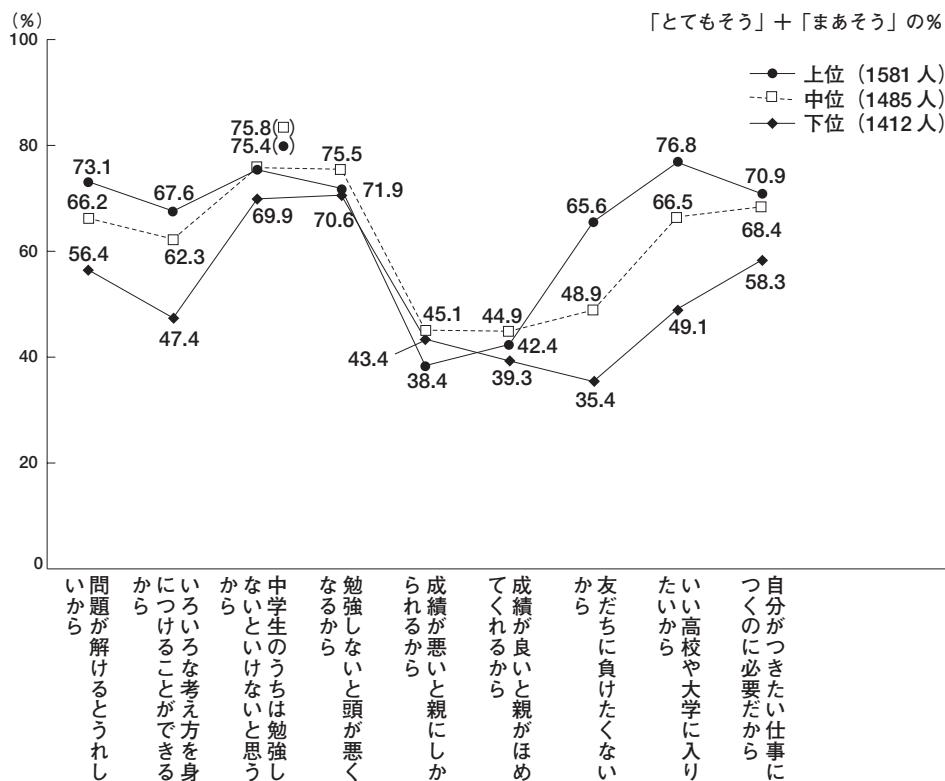
### ◆成績差がみられない“ほめられたい、しかられたくない”という理由

次に、成績と勉強する理由との間にそうした関係が認められないのは「勉強しないと頭が悪くなるから」「小学生のうちは（中学生のうちは）勉強しないといけないと思うから」「成績が良いと親がほめてくれるから」「成績が悪いと親にしかられるから」という4つの理由においてである。これらの理由では、成績の上位・中位・下位層間で、当該理由を肯定する割合に“まったく”差がみられない。すなわち、小学生でも中学生でも、こういった理由は成績にほとんど影響していないとい

うことである。

「勉強しないと頭が悪くなるから」という理由は恐怖心から、「小学生のうちは（中学生のうちは）勉強しないといけないと思うから」という理由は義務感から派生する理由である。いずれも何らかの“プレッシャー”によって勉強をさせられているのである。「成績が良いと親がほめてくれるから」「成績が悪いと親にしかられるから」という2つの理由は受け身的な理由であり、親への依存を示す理由と言える。幼児期であればこういった理由は学ぶこと（学力）に対して重要な役割を果たすかもしれないが、小学校高学年以上では、こういった受け身的、依存的な理由はそういった役割をほとんど果たさないものと言える。

■図3-1-8 勉強する理由（中学生、成績別）



注) 成績（中学生）は、国語・数学・理科・社会・英語の自己評価の合計点によって3区分した

### 3. 学習の取り組み方

中・高生は学習の取り組み方についての後悔や悩みを抱えている割合が高く、とくに小6生から中1生にかけてその割合が急増する。また、学習の取り組み方と成績については、関係性があることが明らかになった。

#### ◆ 中・高生は、学習の取り組み方についての後悔や悩みが多い

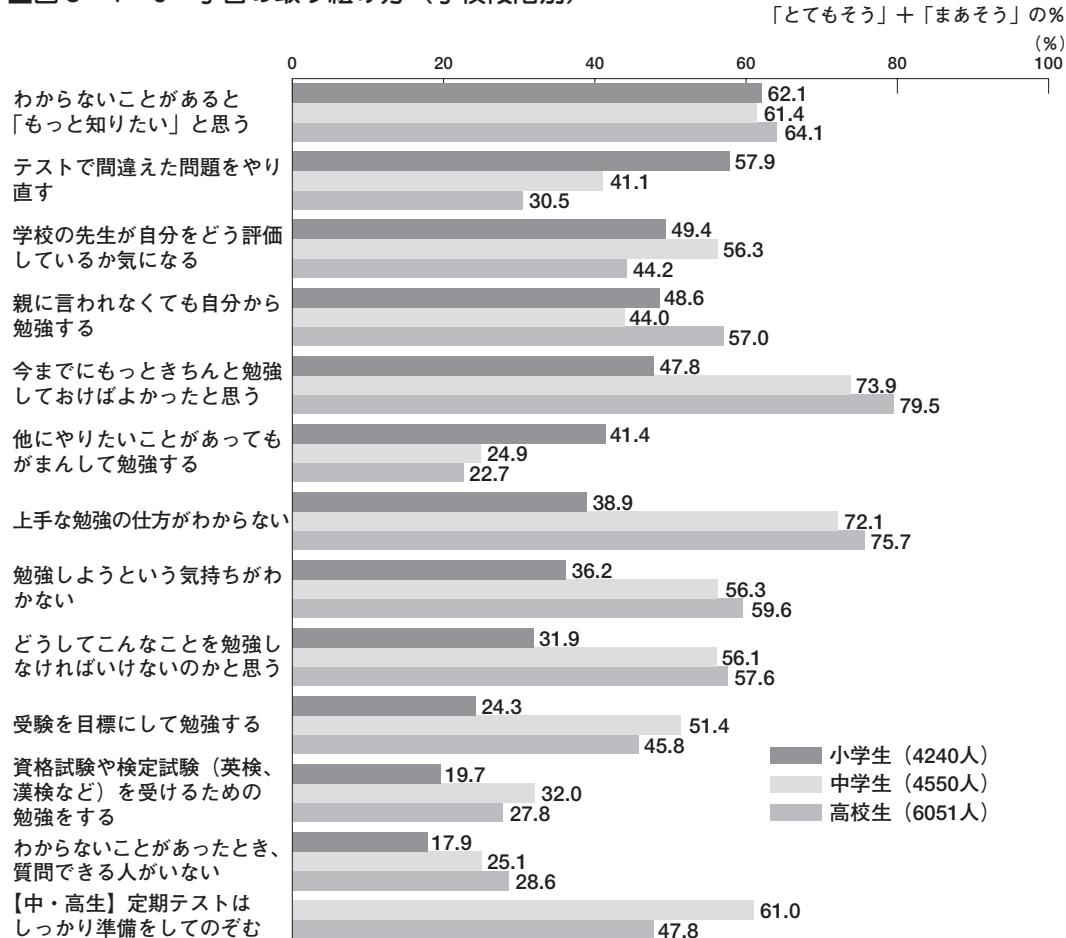
子どもは、学習に対してどのように取り組んでいるのだろうか。図3-1-9は学習への取り組みの様子をたずねた13項目について、学校段階別にみたものである（「とてもそう」+「まあそう」の割合）。

とくに目立つのが、「今までにもっときちんと勉強しておけばよかったと思う」

と「上手な勉強の仕方がわからない」といった、学習の取り組み方に対する後悔や悩みを示す項目が、中・高生でいずれも7割以上が多いことだ。小学生は5割未満であることから、こうした後悔や悩みが中・高生で急増することがわかる。

また、「勉強しようという気持ちがわかな

■図3-1-9 学習の取り組み方（学校段階別）



い」「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」など、学習に対して否定的な気持ちをもつ割合も中・高生で5割以上と多い。これらのことから、学習にどう取り組んだらよいかわからず、戸惑いを感じたり無気力になっている中・高生の姿がみえる。

一方で、「わからないことがあると『もっと知りたい』と思う」は小・中・高校生を通じて6割以上の子どもが肯定（「とてもそう」+「まあそう」）しており、知的好奇心をもつ割合は学校段階にかかわらず、ある程度いるようである。

ただし、「テストで間違えた問題をやり直す」「他にやりたいことがあってもがんじて勉強する」など、地道な努力や忍耐力、自

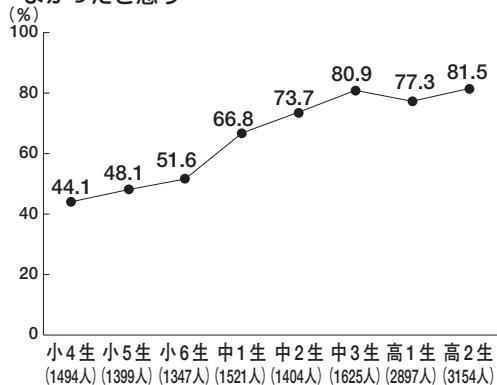
制心を示す行動は、学校段階が上がるにつれて著しく減少する。

### ◆環境変化の大きい中1生にはサポートが必要

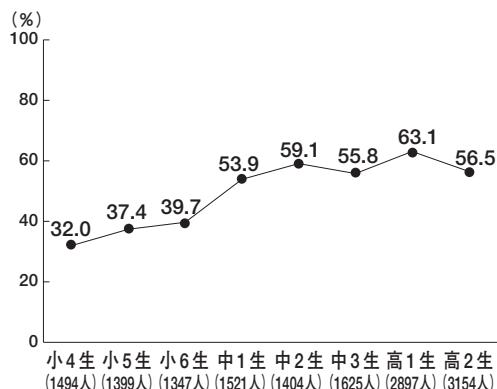
次に図3-1-10で「とてもそう」+「まあそう」の割合を学年別にみてみた。とくに注目したいのが、小6生と中1生の差で、「今までにもっときちんと勉強しておけばよかったと思う」15.2ポイント（小6生：51.6%→中1生：66.8%、以下同様）、「上手な勉強の仕方がわからない」19.7ポイント（45.6%→65.3%）、「勉強しようという気持ちがわからない」14.2ポイント（39.7%→53.9%）、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと

■図3-1-10 学習の取り組み方（学年別）

①今までにもっときちんと勉強しておけばよかったと思う

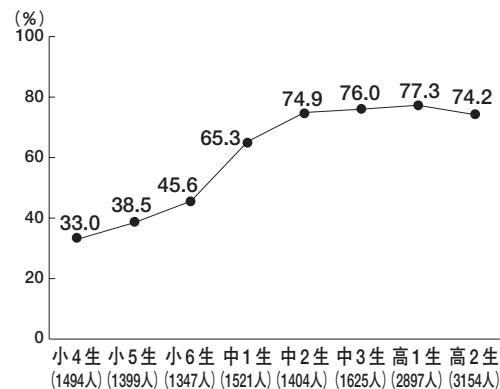


③勉強しようという気持ちがわからない

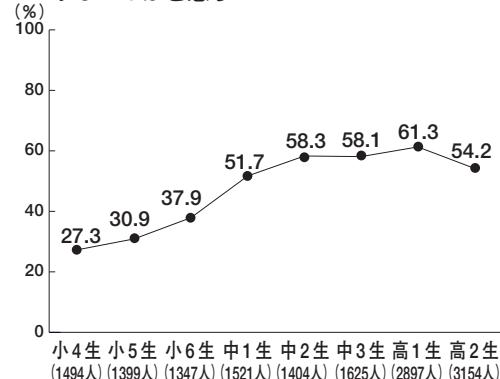


①～④は「とてもそう」+「まあそう」の%

②上手な勉強の仕方がわからない



④どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う



思う」13.8ポイント（37.9%→51.7%）と、後悔や悩みを抱える子どもの割合が、小6生から中1生にかけて急増している。また、中1生から中2生にかけてもさらに割合が高くなることがわかる。

学校での授業内容や評価基準の変化、受験のプレッシャーなど、学習をめぐる環境変化が大きい中1生は、学習に対する苦手意識が醸成されやすい時期といえる。この時期に、学習にどう取り組んだらよいかについて具体的な方策を示すなど、彼らに対するこまめなサポートが必要とされているといえる。

### ◆ 成績下位層に多い悩みや後悔

小学生と中学生を対象に、学習の取り組み方と成績との関係を調べた。成績（小学生では4教科、中学生では5教科の成績を5段階で自己評価してもらい、それらを総合得点化したもの）を上位・中位・下位の3層に分け、それぞれの各項目に対し、「とてもそう」＋「まあそう」と回答した子どもの割合を算出した。小学生と中学生ではほぼ同様の傾向がみられたため、ここでは中学生について取り上げたい（図3-1-11）。

その結果、成績下位層の中学生ほど、学習の取り組みに対する後悔や悩みを抱えている割合が高いことがわかる。「上手な勉強の仕方がわからない」「今までにもっときちんと勉強しておけばよかったと思う」としている割合は、成績下位層の中学生の8割以上にのぼる。これは、成績上位層の中学生よりも15～30ポイントも多い。

では、何をどのように学習したらよいかつかめないでいる成績下位層の中学生たちはどのような気持ちで過ごしているのだろうか。彼らの気持ちちは「勉強しようという気持ちがわからない」「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」がいずれも6割台と多いことにあらわれている。これらの背景には、「わからないことがあったとき、質

問できる人がいない」（成績下位層33.5%、中位層24.2%、上位層18.2%）が示すように、周囲にサポートをしてくれる人がいるかどうかとも関係しているといえよう。

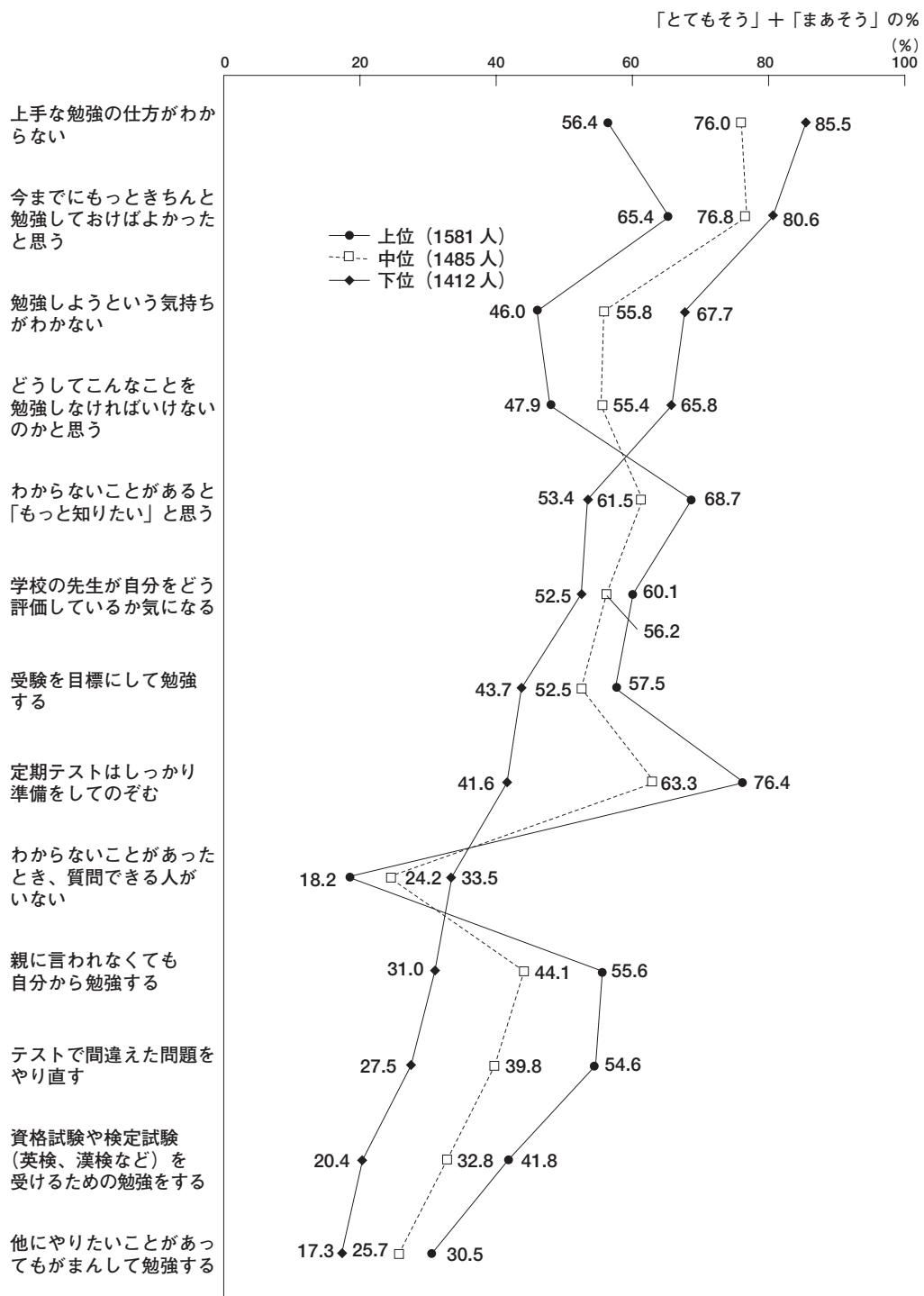
### ◆ 自律的で地道な取り組みの姿勢が重要

次に、「定期テストはしっかり準備をしてのぞむ」「親に言われなくても自分から勉強する」「テストで間違えた問題をやり直す」「資格試験や検定試験（英検、漢検など）を受けるための勉強をする」「他にやりたいことがあってもがまんして勉強する」といった、自律的で地道な取り組みの実践を示す項目についてみてみた。その結果、いずれの項目でも、成績上位層のほうが、中・下位層に比べて「とてもそう」＋「まあそう」と回答した割合が高いことがわかった。とくに「定期テストはしっかり準備をしてのぞむ」は成績上位層76.4%、中位層63.3%、下位層41.6%と、上位層と下位層の差は34.8ポイントと大きい。成績下位層の中学生は、「どのように学習したらよいかわからない→毎日の勉強やテスト準備がうまくできない→成績が伸びず、学習に対するやる気がなくなる」といった悪循環に陥り、悩んでいる姿が浮かび上がってくる。

### ◆ 知的好奇心に働きかける

最後に1つ注目したいのは、「わからないことがあると『もっと知りたい』と思う」についてである。成績上位層68.7%、中位層61.5%、下位層53.4%と、成績の違いによる差異がみられる。しかし、多くの悩みを抱え、やる気をもてない傾向にある下位層の中学生も、2人に1人は知的好奇心をもっているのである。学ぶための原動力ともいえるこの好奇心をかき消すことなく、いかに働きかけるかが、学校、家庭はもちろんのこと、社会全体の責任として求められていることであろう。

■図3-1-11 学習の取り組み方（中学生、成績別）



注) 成績（中学生）は、国語・数学・理科・社会・英語の自己評価の合計点によって3区分した